

## 「メノビレッジ長沼」見学会メモ (2015年5月9日)

### ※エップ・レイモンドさん&荒谷明子さん夫妻の話

#### 【農場の概要について】

・農地面積は 18ha で、水田の比率が高い。飼料米を作り、その玄米を鶏に食べさせる。2年前まで、35種類の野菜を作り 100戸ほどに配達していた（現在は休止中）。CSA（地域が支える農業）の会員は家族なので、「商品を作っている」とは考えていない。それで余ったものを直売所などで販売してきた。

・小麦を栽培し、製粉機もある。5年前にパン工房を開設し、札幌方面にも配送してきた。大豆で味噌を造り、屑大豆で油も搾っている。

・長沼では 50年前、菜種の栽培面積が 670ha あった。しかし、1960年から5年間で町内に9カ所あった搾油所がすべて廃業。菜種の栽培をやめ、お米にシフトしていった。メノビレッジ長沼では、数年前から菜種栽培を始め、仲間たちと菜種油を製造している。

・養鶏は、平飼いで 500羽ほどを飼育している。

#### 【鶏の飼育とアニマルウェルフェア(AW)について】



・ヒヨコは病気に弱いので、毎年、新しい材料で育雛用の小屋（写真左）を作る。米ぬかと鋸屑を混ぜて発酵させたものを床に敷き、3日間温めてから雛を迎える。カーテンで仕切った部屋に、雌 120羽、雄 10羽の割合で2群（計 260羽）を導入。ここは4月20日に雛を入れ、夜は給温している。

・当初から、生まれたばかりの雛を購入して育ててきた。くちばしを水につけてから、暖かい部屋に入れる。育雛は、暖かい部屋と冷たい部屋を行き来できる

ように、間仕切りを工夫。昼間は電気を消し、夜は暖かい部屋に入っているかどうか確認している。母親のところにいるような環境になるよう考えた。小屋が狭くなってきたら、この部屋（鶏舎の一区画）全体に放す。

・餌は、生後3日から玄米のみを与え、腸を鍛える。3日目の途中からは、ヒヨコ用の飼料と青草を刻んだものを毎日与える。青草は、鶏が大人になってからも給与。青草が採れる時期は大量に。小さいうちから青草を食べさせると、鶏は青草が大好きになる。飲み水には酢を入れている。（平飼いという）作られた環境のなかで、鶏が喜ぶようなことをしてきた。

・デビーク（くちばしの切断）はしていない。鶏同士の突つきはほとんど起こらないが、群れによっ

ては突つきが始まる時もある。血を見ると集まるので、鶏のストレスを溜めないようにしている。いじめる側に問題があるケースが多く、(いじめられた鶏の)傷口に歯磨き粉をつけたりする。

・鶏は夜、高いところで寝る習性があるので、雛のときから掴まって寝るところを作っている。鶏舎と通路の境に産卵箱を設置。止まり木(写真右)が低い位置にあると卵が汚れるので、よそよりも止まり木を高くした。

・鶏たちは、日が落ちる2時間ほど前になると、たくさん餌を食べて満腹になり、止まり木に移動する。すべての鶏が止まり木で寝るが、ヒヨコのときから訓練しないとそうはならない。

・よその平飼い養鶏場では稲藁を敷くところもあるが、うちは敷き藁を入れない。砂浴びをすることで、卵の殻の状態が良くなる。土の中の微生物が鶏の健康に良かったのでは。

・投薬はせず、焼酎とトウガラシ、ニンニクを混ぜたものを与えてきた。これまで、コクシジウム(注＝鶏の寄生虫病)以外の病気は発生したことがない。

・一般の養鶏場では産卵開始から1年未満で廃鶏にするが、ここでは1年半～2年ほど飼育する。すると、卵が大きくなってパックに入らなくなったりするので、CSAの会員には説明文を付けて配達したりしてきた。

・野外で鶏を飼いたいのが、キツネに食べられるので、残念ながらやっていない。鶏舎のまわりには、キツネの侵入を防ぐために高さ45cmのパネルや砂利を入れたりしている。

・ヨーロッパでは、いつも運動させている家畜の製品にAWマークを付け、普通に販売している。これからは、そうした製品を考えないと自給率が減ってしまうだろう。



### 【鳥インフルエンザ発生の原因は?】

・今年、鳥インフルエンザの発生で、米国アイオワ州のひとつの養鶏場で530万羽の鶏を殺処分した。病気の原因は渡り鳥と言われているが、こうした大規模養鶏場では外から(渡り鳥が)侵入できない構造の建物。原因は本当に渡り鳥だろうか?

・宮崎県では、口蹄疫や鳥インフルエンザが発生したが、それはたくさんの動物をまとめて飼育するなど農場内での扱い方が悪いからではないか。

・平飼いの鶏は、自分の糞や土を食べる。森の微生物を米ぬかと一緒にしたもの種菌として、鶏舎の中に入れてある。鶏たちは、それを食べる。(床面に)いい菌を増やせば、悪い菌は入ることができない。



### 【循環農業について】

・養鶏をしている理由～循環の環をつなげる役割を鶏がやっていて、①米や野菜屑を鶏に食べてもらい、糞を肥料の原料にする ②屑麦も鶏の飼料にできる ③長沼産の屑大豆を購入して搾油（前ページの写真）をしているが、大豆油粕は飼料にできる。

・鶏の飼料は、メノビレッジ産の玄米と飼料米、屑麦、米ぬか、ふすま、長沼産の大豆油粕のほか、炭酸カルシウムとリン酸カルシウム、塩を少々。冬のみルーサン（アルファルファ）の粉末を与える。

・鶏舎の隣のハウスでは、ボカシ堆肥をつくる（写真右）。原料は大豆油粕と鶏糞、米ぬか、おから（栗山の豆腐店の副産物）。2年前には55tのボカシをつくったことも。畑には10aあたり180kgのボカシ堆肥を入れている。

